

## Ⅱ ハイリスク胎児の産科管理に関する研究

### 分担研究報告書

名古屋市立大学

八 神 喜 昭

ハイリスク胎児の実態の一端を知る目的で反復流産の疫学的調査を行うと共に原因不明反復流産に対する免疫療法の有効性について検討を行った。更に胎児治療の開発へむけ基礎的調査及び臨床応用への研究を行い、ハイリスク胎児の管理について以下の如き成果をあげ得たと考える。

#### A. 反復流産の疫学的調査

生殖医学の進歩に伴い流産の診断、あるいはその治療法も大きく変化をとげて来ている。これらの点よりみて反復流産の実態を調査することは大きな意義がある。本調査は2回以上連続して流産に終わった症例を対象として調査が行われた。その結果、全体の流産率は25.2%、2回連続流産後の次回流産率は20.1%、3回連続流産後の次回流産率は21.2%、4回以上連続流産後の次回流産率は35.9%であり、既往流産回数が増えるに従い、流産率は高くなるとの成績を得た。

しかし未産婦と経産婦との比較では有意差を認めなかった。

これらの成績は現在における反復流産の頻度を示すものとして大きな意義があると考えられるが、従来の報告との差もあり、今後更に調査対象を拡大して、検討すべきものと考えられる。

#### B. 反復流早産の治療に関する研究

原因不明反復流産に対する主として夫リンパ球による免疫療法の有効性について、4施設における成績をもとに検索を行った。

免疫療法施行症例は455例（平均年齢は $31.42 \pm 4.15$ 歳）であった。

全症例とも免疫療法によると思われる副作用は認められなかった。

本治療法による生児獲得率は全体からみて78.8%、連続3回以上流産を繰り返した原発性習慣流産については188/239 78.6%と高率であり本治療法の有用性が認められた。

出生した児についての調査では10例（4%）のSFD児が認められたが、治療による結果とは考え難い発生率であった。

尚、その後の発育については今後の長期追跡調査が必要と考える。

#### C. ハイリスク胎児の治療法開発に関する研究

わが国における胎児異常の検査、診断の実態を把握すべくアンケート調査を行い、羊水穿刺、絨毛採取法、胎児採血、等の実施状態及び、各疾患についての予後を調査し、治療対象を明らかにした。

胎児治療については、胎児水腫に対する治療法の確立等を始めとして新しい試みがなされ、今後の発展が期待される結果を得た。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



ハイリスク胎児の実態の一端を知る目的で反復流産の疫学的調査を行うと共に原因不明反復流産に対する免疫療法の有効性について検討を行った。更に胎児治療の開発へむけ基礎的調査及び臨床応用への研究を行い、ハイリスク胎児の管理について以下の如き成果をあげ得たと考える。

### A. 反復流産の疫学的調査

生殖医学の進歩に伴い流産の診断、あるいはその治療法も大きく変化をとげて来ている。これらの点よりみて反復流産の実態を調査することは大きな意義がある。本調査は2回以上連続して流産に終わった症例を対象として調査が行われた。その結果、全体の流産率は25.2%、2回連続流産後の次回流産率は20.1%、3回連続流産後の次回流産率は21.2%、4回以上連続流産後の次回流産率は35.9%であり、既往流産回数が増えるに従い、流産率は高くなるとの成績を得た。

しかし未産婦と経産婦との比較では有意差を認めなかった。

これらの成績は現在における反復流産の頻度を示すものとして大きな意義があると考えられるが、従来の報告との差もあり、今後更に調査対象を拡大して、検討すべきものと考えられる。

### B. 反復流産の治療に関する研究

原因不明反復流産に対する主として夫リンパ球による免疫療法の有効性について、4施設における成績をもとに検索を行った。

免疫療法施行症例は455例(平均年齢は $31.42 \pm 4.15$ 歳)であった。

全症例とも免疫療法によると思われる副作用は認められなかった。

本治療法による生児獲得率は全体からみて78.8%、連続3回以上流産を繰り返した原発性習慣流産については188/239 78.6%と高率であり本治療法の有用性が認められた。

出生した児についての調査では10例(4%)のSFD児が認められたが、治療による結果とは考え難い発生率であった。

尚、その後の発育については今後の長期追跡調査が必要と考える。

### C. ハイリスク胎児の治療法開発に関する研究

わが国における胎児異常の検査、診断の実態を把握すべくアンケート調査を行い、羊水穿刺、絨毛採取法、胎児採血、等の実施状態及び、各疾患についての予後を調査し、治療対象を明らかにした。

胎児治療法については、胎児水腫に対する治療法の確立等を始めとして新しい試みがなされ、今後の発展が期待される結果を得た。